

[総説]

ソーシャル・キャピタル研究における一般的信頼の位置づけ

小藪明生¹⁾, 濱野強^{1, 2)}, 藤澤由和^{1, 2)}

キーワード：ソーシャル・キャピタル, 一般的信頼, 実証研究

Evaluation of generalized trust in the social capital research

Akio Koyabu¹⁾, Tsuyoshi Hamano^{1, 2)}, Yoshikazu Fujisawa^{1, 2)}

Abstract

Recently, a great deal of attention has been paid for generalized trust. In social capital research, generalized trust has been recognized to be a proxy of the concept of social capital, therefore it was used by much of empirical research. In this paper, we examined in terms of the evaluation of generalized trust in social capital empirical research such as social capital benchmark survey and social capital survey that was conducted by World Bank. Also we examined the secondary data such as General Social Survey. As a result, it is easy for researcher to get the data of generalized trust, and also we can make a planning of various research projects.

Keyword : social capital, generalized trust, empirical research

和文要約

近年、われわれの生活の質や幸福感に影響を与える要因として社会的な要因に着目した観点の必要性が提唱されているなかで、地域の社会的要因であるソーシャル・キャピタルに関してその関心が高まっている。そこで本論においては、一般的信頼をソーシャル・キャピタルの代理変数として捉え、先行研究において用いられている一般的信頼に関する位置づけに関して網羅的な検討を行なうことを目的とした。その結果、一般的信頼を用いることの利点として、多様な手法によりある種のソーシャル・キャピタルの把握が可能になるとともに、地域間比較や経年的変化をも加味した研究デザインに基づく検証をも可能になることが考えられた。

1. はじめに

近年、われわれの生活の質 (Quality of Life) や幸福感 (Well-being) に影響を与える要因として、社会的な要因に着目した研究の必要性が提唱されている¹⁾。こうした潮流のなかで、地域の社会的な要因を示す概念である Social Capital (以下、ソーシャル・キャピタル) が社会科学を中心とする学術分野だけでなく、教育、犯罪、地域づくりなどの政策領域においても、個人の豊かな生活を規定する要因としてその重要性が指摘されている²⁾。

ソーシャル・キャピタルに関しては未だ統一的な定義はなされていないが、ソーシャル・キャピタル研究の第一人者である、Robert Putnam (以下、パットナム) は「ソーシャル・キャピタルとは社会生活の特徴であるネットワーク

1) 新潟医療福祉大学 研究推進機構 地域包括ケア研究センター

2) 新潟医療福祉大学 社会福祉学部 社会福祉学科

[連絡先] 小藪明生

〒359-1162 埼玉県所沢市和ヶ原 3-93-6

TEL/FAX : 04-2948-3773

E-mail : akiokoyabu@gmail.com

(network), 規範 (norm), 信頼 (trust) といったものであり, 強制的な行動を促進することで社会の効率性を改善するものである」と論じている²⁾。そこで, 本論においては, 一般的信頼をソーシャル・キャピタルのある種の代理変数として捉え, 具体的な検討を行なうものとする。

ソーシャル・キャピタルの定量的な把握については, 様々な領域でその試みがなされているが, その規模と包括性という点において世界銀行によるこれまでの取組みと, パットナムとハーバード大学を中心とする取組みが際立っていることが考えられる。そこで両者の取組みを概観することを通して, ソーシャル・キャピタルの実証的把握における一般的信頼の位置づけに関して網羅的な検討を行なうものとする。さらには, 既存の調査データを用いて二次的にソーシャル・キャピタルを把握するという取組みに関しても, General Social Survey を中心として検討を行ない, ソーシャル・キャピタル研究における包括的な知見を得ることを本論の目的とした。

2. 一般的信頼について

ソーシャル・キャピタル研究における信頼とは, 主として家族や近隣などの身近な人々や特定の組織などに対する信頼ではなく, 幅広い他者一般に対する信頼について問うものを意図した研究が多くなされていた。したがって, 具体的な質問としては, Japanese General Social Surveys (以下, JGSS とする) において用いられている「一般的に言って, 人は信用できると思いますか」, General Social Survey (以下, GSS とする) において用いられている「他人と接するときには, 相手の人を信頼して良いと思いますか。それとも, 用心した方がよいと思いますか (generally speaking, would you say that most people can be trusted, or that you can't be too careful in dealing with people?)」が一般的であり, 各調査によってワーディングには多少の変化はあるもののこれらの質問が最も多くの研究において用いられている現状にあった。こうした一般的信頼に関する質問がソーシャル・キャピタルの測定において用いられる契機としては, Robert Putnam (以下, パットナム) のイタリア社会研究を指摘できる。

パットナムは, イタリアにおける地方自治政府のパフォーマンスの善し悪しを説明する要素としてソーシャル・キャピタルという概念を援用し, ソーシャル・キャピタルの下位構成要素 (構成概念) を信頼, 規範, ネットワークとして具体的な地域ガバナンスの指標との検討を試みたものである³⁾。このようなソーシャル・キャピタル理論の根拠としては, Coleman (以下, コールマン) の存在にみることができる。彼は, 合理的選択理論の立場からソーシャル・キャピタルを取り上げ, 「人々の関係の中に埋め込まれたものであり, 物的資本, 及び人的資本同様, 生産的な活動を容易にするものである」と論じている⁴⁾。したがっ

て, コールマンのソーシャル・キャピタル概念においては, 他者との協調的な活動のなかで連帯感が生まれ, 一般的な人々に対する信頼感も蓄積され, そのことでまた協調行動のパフォーマンスが向上するというゲーム理論的メカニズムを基にしているものと考えられる。

また, 理論的な側面にとどまらず心理実験に基づき一般的信頼の検討もなされている。たとえば, 山岸は独自に一般的信頼尺度を用いて囚人のジレンマゲーム心理実験を行ない, 実際に被験者の行動を強く予測しうることを述べている。さらに, 山岸らは見知らぬ人に対しても最初はできるだけ協調関係を作ろうとする高信頼者は, 単にお人好しで騙されやすいわけではなく, むしろ低信頼者よりも相手が信頼できるかどうかに関する情報に敏感で, 相手が信頼できる人間であるかどうかを正確に見極めていることを見出しているのでも指摘している^{5, 6)}。

3. ソーシャル・キャピタルを独自に把握する試みにおける一般的信頼の位置づけ

1990年代後半以降において, ソーシャル・キャピタルの研究の興隆がみられるなかで, その契機として, パットナムとそのグループによる一連の研究, または世界銀行によって行なわれた研究を指摘できる。両者の研究においては信頼や参加といったソーシャル・キャピタルの要素とされる項目を含んだ調査が行なわれており, かつそれらの指標を統合してその国や地域・集団のソーシャル・キャピタル指数を算出する試みがなされている。ただし, 一般的信頼に関しては用いられている質問については若干異なっていることから, 以下では, より具体的な質問項目に関して比較を行なうものとする。

(1) パットナム研究

パットナムは, ハーバード大学 John F. Kennedy School of Government を主体とする Saguro セミナーと呼ばれる研究プロジェクトにおいて, Social Capital Community Benchmark Survey (以下, SCCBS とする) の開発とその具体的な実施へとソーシャル・キャピタル研究を進展させてきたといえる。

SCCBS におけるソーシャル・キャピタルの把握は, 複数の側面からアプローチがなされており, その主要な側面は「信頼」, 「友人関係の多様性」, 「政治参加」, 「市民活動におけるリーダーシップと集団への参加」, 「インフォーマルな社交」, 「寄付とボランティア」, 「信仰を基盤としたかわり」, 「地域における市民的活動のかわりの平等度」とされている。「信頼」はさらに社会的信頼 (social trust) と人種間信頼 (inter-racial trust) の二つから構成されており, より具体的には, 社会的信頼 (social trust) とは, 自分の居住地域や, 生活に関わるなかでの良く見知った特定の人々への信頼をこえた, 特定の個人に対するものではな

い一般的な信頼感を意味するものであるとされている。実際の質問形式としては、回答者に対して、近所の人々、職場の同僚、店員、同じ宗教に属する人、地元の警察のそれぞれを信頼することができるかと尋ねると同時に、「大部分の人々は信頼できるか」という問いを提示している。その一方で、人種間信頼 (inter-racial trust) とは、特定の人種間同士における信頼感を検討するものであり、特定の地域内における多様な人種間構成という状況において、どの程度ソーシャル・キャピタルが構築しうるのかという点を把握するものであるとされている。

(2) 世界銀行

世界銀行によるソーシャル・キャピタル研究への取組みは、1990年代前半より開始されている。そして、1996年には世界銀行を中心に研究者、政策立案者らなどからなる Social Capital Initiatives がスタートし、一連のワーキング・ペーパーが公表され、ソーシャル・キャピタルの実証的な把握に関する検討も行われていくこととなる⁷⁾。

こうした活動は、非常に多くのソーシャル・キャピタルを把握する指標を確立する試みを刺激してきたといえるが、世界銀行が明確な形でイニシアティブを持って展開してきた測定の試みとしては、The Social Capital Assessment Tool (以下、SOCAT/SCATとする)、Social Capital Integrated Questionnaire (以下、SOCAP IQ/SC IQとする)などが存在する。このSOCAP IQ/SC IQにおいては、ソーシャル・キャピタルに関する六つの側面として、「集団とネットワーク」、「信頼と連帯」、「集合行動と協同」、「情報とコミュニケーション」、「社会的凝集性」、「エンパワーメントと政治的行動」を把握するように設計されている。

なお、信頼に関しては「信頼と連帯 (trust and solidarity)」として具体的な質問6項目のうち、4項目が直接信頼に関する質問となっている。たとえば、後述する General Social Survey において用いられている、一般的信頼に関する質問項目をはじめとして、「近隣、およびコミュニティにおける住民などに対してどの程度、信頼をおくことができるか」、また「近隣およびコミュニティ全体の信頼の程度がどの程度変化してきているか」などを問う質問が用いられている。

4. 二次データを用いたソーシャル・キャピタル把握における一般的信頼

パトナム研究や世界銀行の取組みにおいて論じたとおり、独自にソーシャル・キャピタルを把握するという試みのなかで一般的信頼の位置づけには複数の流れがあるといえるが、その他の方法として二次データを用いた試みもなされている。二次データへの着目の契機としては、欧米諸国において公的機関による調査にとどまらず、公的な助成

を受けて得られた調査データは、個票のレベルでも一定期間が経過した後に、その匿名性を担保して一般に広く公開し、それらが利用される体制が整備されている状況が考えられる。したがって、ソーシャル・キャピタルを実証的に把握するという試みに関しても利用可能な二次データを用いて行なうという方向性がかかなり現実的な方法であると考えられてきたのである。たとえば、実際に先行研究において用いられている代表的な公開データとしては、General Social Survey (以下、GSSとする)などを指摘できる。

GSSにおける信頼に関する代表的な指標としては、一般的信頼 (Trust) を指摘することができる。具体的には、パトナムは社会的信頼に関する指標における具体的な測定項目として「大半の人が信頼できるかという問いへの賛同率 (Agree that "Most people can be trusted")」を用いて検討を行なっている²⁾。また、GSSのデータを用いてソーシャル・キャピタルの実証的な把握とその検討を試みた Paxton は、ソーシャル・キャピタルを一般的信頼と「繋がり (association)」という二つの大きな構成要素からなるものとして捉え、さらに一般的信頼に関しては「個人への信頼 (trust in individual)」と「制度への信頼 (trust in institution)」という二つの下位構成要素を設定し、前者に関しては、helpful, fair, trust という具体的な測定項目をGSSの項目から選定している。また、後者に関しては、religion, education, executive, legislature を制度的な対象としてGSSの項目から選定して検討を行なっている⁸⁾。

さらには、上述したGSS以外でソーシャル・キャピタルのなかでも一般的信頼に関する項目を含み、国際比較が可能となる主な大規模調査データとして以下のような調査が存在している。まず International Social Survey Programme (以下、ISSPとする)と呼ばれるものであり、家事、ナショナルアイデンティティ、労働など、毎回テーマの異なる様々な調査が行われている。2004年の「citizenship」などいくつかの調査時において一般的信頼、及びソーシャル・キャピタルに関連する項目が用いられており、それらの結果は様々な他項目との関連についての検討が可能である。日本においては1993年からNHK放送文化研究所がメンバー組織として参加しており、調査を実施している。次いで、ユーロバロメーター (EuroBarometer) であるが1973年から欧州委員会 (European Community) が行っている世論調査であり、EU拡大、社会情勢、健康、文化、情報技術、環境、防衛、市民権など様々なテーマで行われている。2004年12月実施の「social capital」において、一般的信頼、及びソーシャル・キャピタルに関連する項目が用いられている。さらには、アジア・バロメーター (AsiaBarometer) であるが、中央大学猪口孝教授が中心となって東京大学東洋文化研究所附属東洋学情報センターと早稲田大学アジア太平洋研究センターとの共同で行われている東・東南・南・中央アジアを網羅するアジア最

大の比較世論調査であり、一般市民の日常・家族・近隣社会・職場・社会的／政治的制度・経済市場との関係性に焦点を当てている。調査は2003年から2006年までの4回実施されており、一般的信頼、およびソーシャル・キャピタルに関連する項目が用いられている。また、データの公開はなされていないものの、国際比較調査として統計数理研究所が行った一連の研究にもみることができる。統計数理研究所では「日本人の国民性調査」において1978年より一般的信頼を調査項目の一つとして用いており、これをふまえた国際比較調査として「七ヶ国国際比較調査」、「東アジア価値観国際比較調査」を行なっている⁹⁾。

上述のとおり調査データの特徴を鑑みると、二次データを用いて一般的信頼を把握した場合には、地域間の比較や時系列的变化の検証が可能となることから、ソーシャル・キャピタル研究をこのような観点より展開していく場合においては、その代理変数として一般的信頼を用いることは有用であることが考えられた。

4. おわりに

ソーシャル・キャピタル研究においては、様々な質問項目、さらには複数の二次データが用いられていることが明らかとなった。現時点において、ソーシャル・キャピタル研究を展開していくうえで一般的信頼を用いる利点としては、多様な手法によりその把握が可能であるとともに、単に一地点の検証にとどまらず、地域間比較や経年的変化をも加味した研究デザインに基づき検証を行なうことが可能な点にあることが考えられた。その一方で、本来、ソーシャル・キャピタル概念は、一般的信頼のみでは十分に把握しうるものではないという指摘も考えられる。こうした論点については、今後、ソーシャル・キャピタルの研究が蓄積されていくなかで、個人の社会的な価値観レベルの観測値である一般的信頼と、地域の社会的要因であるソーシャル・キャピタルの概念的な議論のなかでさらに深まっていくものと考えられる。

なお、本研究は、平成19年度科学研究費補助金（若手研究（A））「ソーシャル・キャピタルと健康の関係性に関する実証的研究基盤の確立とその展開の研究」（研究代表者：藤澤由和）、平成19年度科学研究費補助金（萌芽研究）「保健医療分野におけるデータアーカイブ構築のための検証研究」（研究代表者：米林喜男）、平成19年度新潟医療福祉大学研究奨励金（発展的研究）「保健医療分野における調査データの統合に基づくサービス提供に関する研究」（研究代表者：米林喜男）における研究成果の一部をとりまとめたものである。

文献

- 1) Berkman F, Kawachi I: Social Epidemiology. Oxford University Press. 2000.
- 2) Putnam R: Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community. New York, Simon & Schuster, 2000.
- 3) Putnam R: Making Democracy Work; Civic Traditions in Modern Italy. Princeton, New Jersey, Princeton University Press, 1993.
- 4) Coleman, J S: Foundations of Social Theory. Cambridge, MA, Harvard University Press. 1990.
- 5) 小杉素子, 山岸俊男: 認知特性としての信頼. 日本グループ・ダイナミックス学会第43回大会発表論文集, 150-151. 1995.
- 6) 菊地雅子, 渡邊席子, 山岸俊男: 他者の信頼性判断の正確さと一般的信頼. 実験研究実験社会心理学研究, 37 23-26. 1997.
- 7) Grootaert C, van Bastelaer T: Understanding and Measuring Social Capital: A Synthesis and Findings from the Social Capital Initiative. Social Capital Initiative Working Paper 24. Washington DC, Social Development Department, World Bank, 2001.
- 8) Putnam R: Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community. New York, Simon & Schuster, 2000.
- 9) Paxton P: Is Socaial Capital Declining in the United States? A Multiple Indicator Assessment. American Journal of Sociology, 105: 88-127, 1999.
- 10) 吉野諒三: 富国信頼への時代へ; 東アジア価値観国際比較調査における「信頼感」の統計科学的解析. 行動計量学, 32 (2), 147-160, 2005.